

地域遺産としてのシシ垣遺構

Traditional defence (Shishi-gaki) as local heritage

高橋 春成*

Shunjo TAKAHASHI

はじめに

シシ垣は、漢字で「猪垣」、「鹿垣」、「猪鹿垣」と書く。遺構といえば、これまで貴族や豪族、武士などの遺構が注目され、農民の遺構であるシシ垣の多くは等閑視されてきた。平成17年施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たに文化財に位置づけられ、シシ垣も「農林水産業に関連する文化的景観」として注目されるようになったことは意義深い。これを機に、今後さらに、全国のシシ垣のデータベース作り、シシ垣の文化財指定、シシ垣の保存と有効活用についての取り組みを推進する必要がある。

シシ垣には当時の獣害の甚大さとそれに対処した農民の生活史が深く刻まれていて、'地域の財産'として極めて貴重である。歴史的・文化的に貴重であるとともに、地域の子供たちの郷土学習、総合学習、環境学習の教材にもなる。また、今日のイノシシやシカなどの農作物被害対策においてシシ垣にみられる先人の知恵や団結力に学ぶことも多いし、エコミュージアムやエコツアーの対象にもなる。地域住民にとっても来訪者にとっても、シシ垣のある場は貴重な感得の場となる。このように高い価値を有するシシ垣遺構の保存と活用を図るには、地域に残されたシシ垣を記録し、種々のデータを整理し、まずはシシ垣に対する地域住民の意識を高める必要がある。

このような観点のもとに、本研究では滋賀県比良山地山麓のシシ垣（大津市荒川地区）を事例に考察を行う。当地のシシ垣遺構については、これまでにその位置や構造の特徴把握を試みたものはあるが（斎藤, 1934; 井上, 1985）、さらには住民をとりこんだ保存・活用などの検討を視野に入れていく必要があると考える。

我国におけるシシ垣研究は、歴史地理学の矢ヶ崎（1989, 1990, 1992, 2001）によって精力的にすすめられた。矢ヶ崎は、全国的な視点から市町村史誌類などの資料を収集・整理し、シシ垣の分布や構造の特徴などについてまとめた。矢ヶ崎の仕事によって、シシ垣の全国的な概要が明らかになってきたことをふまえ、今後は地域ごとのシシ垣の詳細、そして、その保存と活用について検討を加える段階に入った。

シシ垣研究は、歴史学においても近年注目され、佐竹ほか（2005）は、広島県安浦町に残るシ

シシ垣の築造の歴史や築造当時の自然環境について考察を加えている。また、近年の増大するイノシシやサル、シカなどによる農林業被害の対策を検討するにあたり、伝統的なシシ垣の構築や構造に注目しようとする研究もみられるようになった(羽山,2001)。

シシ垣が各方面で注目され、その保存と活用が重要となっている今日、全国的なシシ垣に関する情報交換や交流の場も必要となっている。筆者はシシ垣のネットワーク作りを行い(高橋,2001,2003,2007)、2008年度から各地のシシ垣関係者を集め「シシ垣サミット¹⁾」を実施しているが、このようなものがひとつの推進母体になれば幸いである。

1 滋賀県大津市荒川地区のシシ垣遺構

(1) 土石流対策・獣害対策併用のシシ垣

比良山地の山麓にある旧志賀町荒川地区には、イノシシやシカの侵入防止と水害・土石流災害対策を兼ねたシシ垣が残っている。比良山地は典型的な地壘山地であり、急崖を開析する河川から山麓に大量の土砂が供給されてきた。山地から流れでる短く急勾配の河川をみる山麓には、土石流扇状地や天井川が発達してきた。このような比良山地山麓には、水害・土石流災害対策を兼ねたシシ垣がみられる。このようなタイプのシシ垣は全国的にもめずらしいと思われ、この地域のシシ垣の記録、データ整理、保存と活用は重要である。

シシ垣は明治初期の「滋賀郡荒川村等級縮絵図」(図1)に描かれ、当地には旧荒川村の文化13(1816)年、文政3(1820)年、文政7(1824)年、慶応2(1866)年の「猪垣割合帳」が残っている。志賀町史編集委員会編(1999)によれば、「文化13年の「小川原上ハ水分より海道迄



図1 荒川村等級縮絵図(大津市歴史博物館蔵)

猪垣割合」では、総間数156間、石高240石1斗1升8合で、石に4尺一寸と田畑の所持高を基準に割り当てている。一方、文政7年の「海道下猪垣割合帳」では、木戸村からの出作を除き、235間の内、30間は「上」が持ち、残りの205間を本家27間は4尺ずつ、半家5軒半は2尺ずつで合計20間を負担し、残りの185間は田畑の所持高に応じて、一石につき4尺7寸の負担としている」とある。

シシ垣は村人が協力して造ったもので、その維持・管理も含め分担しながら一致団結して事にあたっていた。構築にあたっては、周辺に産する比良山地の花崗岩が利用されている。シシ垣の材料は、石が豊富に産するところでは現地の石が利用されてきた（矢ヶ崎, 2001）。絵図には石積みとその上に設けられた木の柵が描かれ、凡例に石積みは「鹿石垣」、木柵は「鹿木垣」とある。道とシシ垣が交差するところには木戸口が設けられている。木戸口は、シシ垣と生活道路が交差する場所に設けられた門のことで、夜間はここに板などをはめこむ必要があった。それは、集落の内部と外部を遮断し、イノシシやシカの侵入を防ぐためである。

比良山地の山麓部は複合扇状地帯で、短くて流れの急な河川を挟んで複数の集落が横一線状に並ぶ。このような集落は、山地側から侵入するイノシシやシカの農業被害防除において同一条件下にあったため、隣の村とシシ垣を繋いでいるところが多い。旧荒川村の北東側は、隣村との間に大谷川が流れているためシシ垣を繋がず自村の耕作地と集落を囲っているが、河川に面する側の石積みは洪水や土石流災害対策を兼ねていた。大谷川の決壊しやすいところには洪水・土石流対策のための堤が造られたが、興味深いのは、このような堤の内側に位置し、北東側のシシ垣が最後の防波堤としての役割を兼ねていたことである（図2）。



図2 堤とシシ垣（大津市歴史博物館蔵）

(2) 二つの村を囲ったシシ垣

旧荒川村の南西側には旧木戸村がある。旧荒川村と旧木戸村は、山地側から侵入するイノシシやシカの侵入において同一条件下にあったため、両村のシシ垣を繋いで防御にあたった。シシ垣は、外から受ける脅威から村の財産である宅地や田畑を守るために造られた。そのため、家屋や田畑を取り囲むように、山林原野との境界に設けられている。石積みのシシ垣は恒久的なものであったことから、防波堤となるシシ垣によってこの部分の当時の土地利用が決定されていたことも興味深い。

同じ条件下にあった村同士が共同のシシ垣を築いたのは、同時に造らないと被害防御の効果が差がでること、個々の村々でシシ垣を造るよりもシシ垣の長さが短く手間が少なくなること、村と村の間にシシ垣ができることにより村間の交通・交流が妨げられることを防ぐことができることなどによるものと考えられる。

(3) 修復・増強されたシシ垣

かつて荒川・木戸の両集落を囲っていたシシ垣は、その後の土地改変によって多くが取り払われ、現在は一部が残る状況にある。特に、木戸のシシ垣や国道161号線より琵琶湖側の荒川のシシ垣は、住宅などの建造物や湖西道路の建設などによって無くなってしまった。

荒川のシシ垣の一部は、昭和10年6月27日の集中豪雨時の土石流災害で破壊され、その部分は昭和12年に村総出で修復・増強された。昭和10年の集中豪雨時、大谷川右岸の標高210m地点付近で堤防が決壊し、土石流が標高118～122m付近のシシ垣（約100m）を破って水田に被害をもたらした（松田,2000）。集落の北東部の家屋は浸水し、田畑は土砂で埋まったといわれる。

シシ垣の修復・増強は、土石流で押し出されてきた比良山地の花崗岩が使われた。石を人の力で動かせる大きさに割って利用したという。比良山地は花崗岩地帯で、荒川と木戸には石屋を造る者が多かった。荒川は50戸ほどの集落（明治～大正）であったが、20～25戸ほどが農業と石屋の兼業だった。1852年（嘉永5）の大谷川の堤防決壊時には、荒川村民の過半数は石屋に変わり、荒れ地の石堀に従事した。当地は花崗岩が豊富で、礎石や野面石などが大津方面に出荷された。木戸も石屋が多く、石燈籠・石塔・礎石・野面石・庭石などが生産された。

荒川での聞き取り調査によれば、石屋には石を割る仕事と石を加工する仕事があった。石屋は花崗岩を割石や石灯籠、石塔などに加工していたが、加工に向かない石や石を切る際に出る石の端はシシ垣に使われた。このように、シシ垣の修復・増強には、当地で築かれてきた石屋の技術が活かされてきた。

昭和10年の土石流災害時、蓑笠を着た村人が川のようなすを見に行き、堤防の決壊のおそれを知らされたお寺（万福寺）の住職が本堂にある半鐘を早鐘で打ち鳴らし、村人に危険を知らせた。村人は、万福寺や集落の西側の親戚宅などに避難したという。

このような土石流災害の危機がせまると、村人は当地で‘ひ’と呼ばれるものを担いで、木戸口にはめたという。‘ひ’は、木戸口を締め切り、土石流の侵入をくい止める役割をもっていた。イノシシやシカの侵入に加え土石流の侵入を防がなければならない個所では、‘ひ’は頑丈なものでなくてはならなかった。修復・増強後の‘ひ’は、スギやヒノキの角材（10～15cm角、長さ3mほど）

を用い、木戸口の両側のシシ垣に設けられた‘ひ’のはめ口（写真1、図3の③）に横にして10本ほどを積みあげた。これらの‘ひ’は、木戸口の近くの家や万福寺の縁の下に保管していた。



写真1 木戸口と‘ひ’のはめ口

現存するシシ垣の木戸口の位置が図3に示される。まず、修復・増強された周辺のシシ垣をみってみる。図中の①、②、③の木戸口の両側のシシ垣の断面の基部と頂部の厚みをみると、①（山側から見て左側のシシ垣は、基部275cm、頂部215cm；右側のシシ垣は、基部240cm、頂部226cm）、②（左側のシシ垣は、基部190cm、頂部150cm；右側のシシ垣は、基部190cm、頂部150cm（一部崩れている））、③（左側のシシ垣は、基部220cm、頂部155cm（写真1）；右側のシシ垣は、基部235cm、頂部200cm）となっている。これらは、イノシシやシカのみを対象とするシシ垣に比べて厚みがある構造となっており、土石流対策用であることがわかる。

木戸口の一部はその後、車社会になって自家用車などが通れるように拡張された。拡張されていない①の木戸口の幅は280cmであるが、シシ垣の一部を取り払い拡張した②と③の木戸口の幅は、それぞれ470cm、525cmとなっている。

シシ垣の高さ（外側）は、1.1m～2mほどである。簡易水道の工事が昭和28年に始まり、その時の工事で道の一部がかさ上げされたことなどにより、シシ垣の高さには高低ができています。

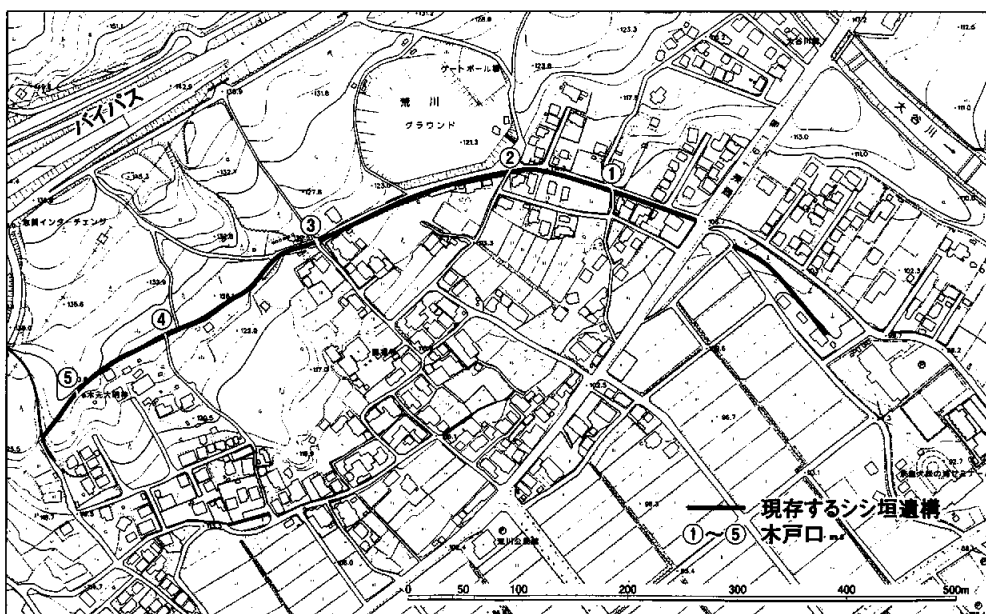


図3 現存するシシ垣と木戸口

石の積み方をみると、昭和10年の土石流で破壊された中心部は、加工された石積みになっている（写真2）。ここは高さ（外側）が2mあり、城壁のように修復・補強されている。

シシ垣を上部から見ると、山側と里側の両面に大きな石を配置し、両面の間には小石を詰め、石垣が崩れるのを防ぐ工夫をしている（写真3）。



写真2 修復・増強されたシシ垣



写真3 石積みの工夫

昭和10年の土石流災害後、大谷川の砂防堰堤の工事が行われた。そして、その後は土石流災害は無くなった。土石流災害やそれを防ぐシシ垣のことは、災害を体験したり、その様子を聞くことが無くなった若い世代には関心のないものとなっているが、修復・増強されたシシ垣は、当時の災害体験者やその話を聞かされてきた世代には、今も土石流災害を防ぐものとして大切だという認識が残っている。

(4) 残存するシシ垣

現存するシシ垣の西側や国道161号線を挟んで東側には、石積みの厚みや石の加工などにおいて異なったシシ垣がみられる。ここに残存するシシ垣は、崩れたり改変された箇所が目立つ。その中であって、木元神社付近のシシ垣は、神社に属する木戸地区の氏子の管理のもとに往時の面影をとどめている（写真4）。崩壊したり周囲に土砂などが積もったりして往時の正確な高さは不明であるが、現存しているシシ垣の最も高い部分は1.5mである。



写真4 木元神社付近のシシ垣

西側に残存するシシ垣に、2カ所の木戸口がある（図3の④、⑤）。それらの基部と頂部の厚みは、④（左側のシシ垣は、基部120cm、頂

部95cm；右側のシシ垣は、基部125cm、頂部85cm)、⑤（左側のシシ垣は、基部120cm、頂部90cm；右側のシシ垣は、基部170cm、頂部140cm）である。

シシ垣を上部から見ると、ここでも山側と里側の両面に大きい石を配置し、両面の間には小石を詰め、石垣が崩れるのを防ぐ工夫をしている（写真5）。西側や国道の東側のシシ垣の積み方は、自然石を用いた野面積みが主となっている。



写真5 石積みの工夫

2 シシ垣に対する住民の意識

(1) アンケート調査

荒川地区周辺は、昭和30年代末に国道161号線ができ、昭和49年にJR湖西線が開通したころより京阪神のベッドタウンとなった。それに伴い、外部から新住民が入り込み混住化が進んだ。JR湖西線の開通をむかえようとするころ、京阪神の宅地造成業者が押しかけ、土地を買収し、湖西地域の里山や里地を変えた。荒川の集落は50戸ほどの戸数であったが、このような中で集落周辺の山林や田畑が買収され、外部から入ってきた新住民の住宅地、別荘、民間会社などの厚生施設などとなっていった。現在は、旧住民の戸数が約60戸、新住民の戸数が約140戸となっている。新住民の住宅の多くは国道161号線よりも琵琶湖側にあるが、残存するシシ垣の周辺にもみられる。シシ垣の内部の田畑が売却され、その中に新住民の住宅や山荘などが建てられ、シシ垣の外部にも新住民の住宅や厚生施設などがみられる。

このような混住化が進む中で、シシ垣の保存や活用を図るには、旧住民のみならず新住民を含む包括的な検討が必要となる。当地のシシ垣に関しては、旧住民と新住民の混住化の中で保存と活用をいかに図っていくかが重要なテーマとなってくる。

まずは、旧住民と新住民がシシ垣をどのように認識しているのかを分析し、その上立ってシシ垣の価値の理解を進め、保存と活用に対する関心が高まるようにしていく必要がある。ところが、旧住民の古老などへの聞き取り調査から、当地のシシ垣に関する知識が風化していること、特に若い世代にそれが顕著であることが随所にうかがわれた。土石流災害は昭和10年を最後に起きておらず、イノシシやシカの侵入を防ぐ役割も現在は電気柵などにとってかわられたことがその背景にある。高度経済成長期以降に新たに入ってきた新住民にとっては、シシ垣の存在はさらに郷土や生活といったものと繋がらないものである。

そこで筆者は、アンケートをつぎのように二段構えで行うことにした。まずは、通常の形式のシシ垣に関するアンケート項目の用紙を作成する。回答者は、この用紙の記入が終わればつぎの用紙に進む。ここには、当地のシシ垣を解説したものをわかりやすく示しておく。この解説資料をみた後、回答者はもう一度シシ垣のアンケート項目に記入する。このようなアンケート方式で、

解説資料をみた後にシシ垣に対する見方がどのように変わっていくかをみる。

このような方式のアンケートを試みたのは、シシ垣に関する資料の提示や解説などによる啓発が、地域のシシ垣の保存や活用の取り組みの契機や推進に重要な役割を果たすこと、新住民にとってもシシ垣理解を進める重要なものとなることを指摘できると考えたからである。

また、解説資料に盛り込んだ内容は、古老や関係者からの資料収集や聞き取り調査などから得たものを多く含むことから、このような地域に残るシシ垣情報の掘り起こし作業が重要となることも指摘できると考えたからである。

(2) 旧住民と新住民の意識

アンケートに答えてくれた住民は54人である。内訳は、旧住民が33人（以後、Aとする）、昭和45年以降に転入してきた新住民が21人（以後、Bとする）であった。

性別は、A：男性21名、女性12名、B：男性10名、女性11名である。年齢は、A：10歳未満0名、10代2名、20代3名、30代2名、40代6名、50代6名、60代7名、70代6名、80歳以上1名、B：10歳未満0名、10代1名、20代1名、30代7名、40代4名、50代4名、60代4名、70代0名、80歳以上0名である。

A、Bともに性別や年齢層にバランスのとれた回答を得た。Aで中高年層の男性からの回答が目立つのは、シシ垣普請という郷土性の高い男の仕事がテーマであるためであろう。その中において80歳以上の回答者が少ないのは、荒川では80歳以上の男性高齢者が極めて少なく、その影響が出ているものと考えられる。

Bでは、30代の回答者数や女性の回答者数が目立つ。これは、新住民の年齢層や男女共同参画などが反映されているものと考えられる。

回答者の職業などは、A：学生4名、会社員9名、公務員3名、自営業1名、農林業2名、主婦4名、寺院住職1名、在宅職員1名、無職4名、B：学生1名、会社員6名、教員1名、自営業2名、主婦9名、無職2名である。

まず、シシ垣に関するいくつかの質問項目に対する回答を示す。

○「石垣は何と呼ばれるか」

Aは、33名の内29名が「シシ垣」と回答し、呼び名を「知らない」と答えた4名を大きく上回った。一方Bは、21名の内10名が「シシ垣」と答え、呼び名を知らない者は11名にのぼった。AとBを比較した場合、「シシ垣」と答えた回答率はAが大きく上回った。

Aの「知らない」と答えた4名の内の3名は、10代から20代前半の若い世代であった。Bで「シシ垣」と答えた人の居住年数の平均は11.3年、知らない人の居住年数の平均は6.5年で、居住年数が多くなるにしたがって「シシ垣」について知るようになる傾向が出ている。

○「石垣が造られた目的を知っているか」

Aは、28名が「知っている」と答え、「知らない」と答えた5名を大きく上回った。一方Bは、「知っている」が11名、「知らない」が10名であった。AとBを比較した場合、Aの「知っている」と

答えた率はBを大きく上回る。これらの傾向は、先の質問項目とほぼ同じである。

「知っている」と答えたAの28名は、具体的な目的を「災害防止と水害対策のため(13名)」、「水害・災害対策(8名)」、「イノシシ除け(6名)」、「部落の危険を守るため(1名)」と答えた。Bの11名は、「獣害防止と対策のため(4名)」、「イノシシ除け(4名)」、「土石流・水害対策(2名)」、「猪に追っかけられた時、襲われないように造られた(1名)」と答えた。A、Bともに、「知っている」と答えた者は石垣の役割を正確にとらえていた。

○「石垣が造られた目的をなぜ知っているのか(複数回答)」

Aは、「祖父母から聞いた(19名)」、「親から聞いた(15名)」、「新戚から聞いた(1名)」、「勉強して学んだ(2名)」、「建設時の写真を見た(1名)」、「いつのまにか知っていた(3名)」で、Bは、「友達から聞いた(3名)」、「勉強して学んだ(2名)」、「村の人から聞いた(6名)」、「いつのまにか知っていた(2名)」であった。

Aは、祖父母や親などからの言い伝えが大きく寄与していることが分かり、Bは、旧住民からの情報入手が目立つ。

(3) 解説資料を見た後の意識

つぎに、荒川のシシ垣普請の歴史、隣接する木戸村と繋がるシシ垣、一致団結して行った構築と維持管理、シシ垣の役割、シシ垣の構造、シシ垣の資材、昭和10年の土石流災害とシシ垣の修復・増強、現存するシシ垣の状況などについての解説資料を見た後のいくつかの質問項目に対する回答を示す。

○「解説資料を読んで感じたこと、気づいたことを自由に書いてください」

A：「小さい頃シシ垣の上を友達と一緒にずっと歩いていた思い出があります。石垣は荒川にとってあるべくしてあるもので、荒川という集落を守っている、まとめているもので、その役割以上のものが荒川の人々に働いているのではないのでしょうか」

「昔の人の知恵と手先の器用さがよくわかる」

「シシ垣は昔の人達の知恵のかたまりと思っています」

「地元にあるシシ垣の事を知れてよかった」

「昔の人々が村を守るため、村総出で力を合わせてシシ垣を作ったことに対して敬意を感じます。それが今日もしっかりと残っていることに対し、歴史を感じ、大切に残していきたいと思います」

「昔は集落全体の対策であったが現在は個別の対策になってきている」

「地域の共同目的のために造られたことは知っていたが、具体的な資料を見るのは初めて」

「昭和の水害の時には遠方からも復旧の応援にこられ、トロッコで土砂や流れた岩などを運んだときいている。真に先人の苦勞が偲ばれる「ししがき」である。そのような先人の苦勞が私にも伝わり、荒川地区の皆さんの心にも伝わっている。こういう背景・風土が地域の人の人柄に表れていると常々感じている」

「何回も被害に遭いたいへんな思いをし、みんなで協力しあって、作ってもらったシシ垣に歴史を感じました。昔の人の息づかいを感じることができました」

「詳しい資料を見たのは初めて」

「昔の構造物なので後世に残しておきたいものです。大津市の文化財として看板等を立てて皆様に見てもらいたい」

「23年間この地に住んでいたが、自分の知らないことがずいぶんあるんだと感じた」

「我々のご先祖様から授かった家や土地を守るために、村人総出で頑張っただけの様子がよくわかった」

「昔から伝えられている通り、水害の度、非常に苦勞されたのだと思うと共に砂防工事の大切さを痛感した」

B：「昔の人の知恵に感心」

「荒川に住んでいながら、石垣の目的も十分に知らなかった」

「“ひ”が完全にはまっている姿が見たい」

「大谷川の氾濫は以前聞いたことがあります。シシ垣はそういう役割もしていたのだと知りました」

「郷土の大事な財産だと思う」

「猪、鹿、水害を防止するため、村総出で石組み。昔の人の知恵には感心する」

「勉強になりました」

「水害被害防止のために強固な協同体を作っていたことを今回知りました。今の協同体の希薄な地域有様と比べると随分皮肉なものだと思われま

す」

「大谷川の氾濫防止のためとは知らなかった」

「動物からの被害防止のためのシシ垣とは知らなかった」

「現在シシ垣は役割を果たしてないと思う」

これらを見ると、旧住民は、'あらためて先祖の苦勞や偉業に思いをはせ、そのようなものを誇りとする、シシ垣を誇りとする、大切にしたい'という思いをもつことがわかる。また新住民は、シシ垣のことを知り、感心したり、興味・関心を示すようすが示される。

○「シシ垣が造られた目的や歴史を子や孫に話そうと思いますか」

Aは「ぜひ話そうと思う（22名）」、「話そうと思う気持ちになった（6名）」、「思わない（2名）」、「記入無し（3名）」、Bは「ぜひ話そうと思う（9名）」、「話そうと思う気持ちになった（9名）」、「思わない（2名）」、「記入無し（1名）」であった。

これらより、A、B共に多くの者がシシ垣について子や孫に語り継ぐことに前向きになることがわかる。

○「このシシ垣を文化財として保存したいと思いますか」

Aは「ぜひ保存したい（14名）」、「どちらかといえば保存したい（14名）」、「保存しなくともよい（3名）」、「特に興味無し（1名）」、「記入無し（1名）」、Bは「ぜひ保存したい（7名）」、「どちらかといえば保存したい（6名）」、「保存しなくともよい（1名）」、「特に興味無し（3名）」、「記入無し（1名）」、「その他（3名）」：「崩れかけた危険な所があるのでなんとかしてほしい」、「邪魔にならなければ置いておけばいい」、「土地の者ではないからわからない」であった。

ここでも、A、B共に保存への関心が高くなるのがわかる。ただ、積極的な保存志向は全体の保存志向の半数程度である。新住民の中には興味を示さない者もいる。

以上の結果から、解説資料による啓発が、地域のシシ垣の保存や活用の取り組みの契機や推進に重要な役割を果たすこと、新住民にとってもシシ垣理解を進める重要なものとなることうかがえた。

また、解説資料に盛り込んだ内容は、古老や関係者からの資料収集や聞き取り調査などから得たものを多く含むことから、このような地域に残るシシ垣情報の掘り起こし作業が重要となることもうかがえた。

旧住民は、年齢層の上の者はシシ垣と土石流災害やイノシシなどの被害対策との関係を知っている率が高いが、年齢層が下がるに従いその率は低くなる。このような状況下で重要なのは、当地のシシ垣についてのまとまったデータを住民が共有することである。そのことによって断片的な知識が改善され、先祖の苦勞や偉業をしのび、シシ垣を誇りとして大切にしたい、という気持ちが出てくる。新住民は、旧住民に比べシシ垣に関する知識は相対的に低く、知らないと答える者も多い。しかし、まとまったデータを提供すると、これまで知らなかったシシ垣について驚きと感心を示す。そして、自分たちがそのような場所に住んでいるということを認識し、シシ垣の保存・活用に関心を示す傾向が出る。

今回の取り組みでは、まとまったデータの収集と提供は筆者が行ったが、今後は地域住民が主体的に取り組む体制づくりをする必要がある。しかし現実には、多くの地域でシシ垣は過去のものとして忘れ去られ、シシ垣遺構の崩壊や取り払いが進行している。そのような中で、シシ垣の価値と保存・活用に関する地域的な取り組みの重要性を提言していく中核的な活動組織やネットワーク作りが必要となっている。筆者が立ち上げた「シシ垣ネットワーク」²⁾が、そのような橋架けのひとつとなり、各地のシシ垣の保存・活用を推進できれば幸いである。

おわりに

昭和10年の土石流災害後、大谷川の砂防堰堤の工事が行われ、その後土石流災害は無くなった。修復・増強されたシシ垣は、当時の災害体験者やその話を聞かされてきた世代には、今も土石流災害を防ぐものとして大切だという認識が残っているが、それも年月の経過と共に風化しつつある。

一方、イノシシやシカによる農作物の被害は現在もみられる。そのような中で住民は、現代版シシ垣である電気柵やトタン柵、ネットなどによる防除を行っている。しかし現在は、被害対策

に積極的な一部の農家による個別の対応が主流である。兼業化、高齢化、農地の売買などが進み、農業経営が限定的となっている今日、さらに新住民との混住化が進む中、従来のシシ垣にみられたような地域ぐるみの取り組みは不必要かつ困難なものとの風潮がある。

それを示す象徴的な事態がみられる。シシ垣の外部の里山の手入れ不足とシシ垣の内部の農地の荒廃や竹林の放置の中で、図3の木戸口④からシカやイノシシが侵入し、近年、一部の農家の田畑やタケノコなどへの被害が目立っている。これへの対応として、被害を受けている農家はシシ垣の内部で個別に電気柵やトタン柵を設置しているが、近辺の農地を持たない新住民は被害対策をすることはない。また農家間でも違いがみられ、被害対策の意識の低い農家もある。

4年前から、木戸口④に新たに侵入防止のための開閉式のゲートが設けられ、被害が目立つ時期の夜間はゲートが閉められる。このゲートの開閉作業は、被害を最も深刻に受けとめている一戸の農家が主として行っている。この木戸口は、新住民がこの近辺に家を建て、車で湖西道路のバイパス（図3参照）を使って通勤などを行うようになってから頻りに再利用されるようになった。

旧住民間での被害対策の温度差や旧住民と新住民の違いなどがみられる新たな時代にあって、獣害対策も新たな舵取りが必要となっている。しかし、基本的に重要なことは、旧住民も新住民も合わせて地域ぐるみで事にあたるということである。近年のイノシシやシカの里地への侵入は、里山や里地の生息環境の変化によるところが大きい。生息環境の変化は、社会経済の影響を受けた人間による土地利用の変化がもたらしている。これからは、健全な地域の生物多様性の創出と生き物との共生が必要である。

健全な地域の生物多様性の創出と生き物との共生は、農家・非農家、旧住民・新住民などの区別なく、地域ぐるみで取り組む課題である。当地に残る土石流対策と獣害対策を兼ねたシシ垣遺構は、時代は違うが、地域ぐるみで取り組むことの重要性を教えてくれる貴重な地域遺産となる。

【文献と注】

- 井上顕纒 (1985): 「シシ垣」についての一考察. 京都学園大学論集, 14-2, 164~176.
- 斎藤 忠 (1934): 猪垣遺蹟考. 歴史地理, 63-4, 1~17.
- 佐竹 昭・福本俊彦・向 巖 (2005): 瀬戸内野呂山麓内平村の猪鹿垣について. 日本研究, 特集号3, 5~32.
- 志賀町史編集委員会編 (1999): 『志賀町史 第二巻』 滋賀県志賀町.
- 高橋春成 (2001): シシ垣ネットワークの設立. 野生生物保護学会2001年大会・自由集會記録.
- 高橋春成 (2003): シシ垣探検 (前編・後編) - 大学と地域の連携のもとに -. 地理, 48-3・4, 73~79, 102~107.
- 高橋春成 (2007): 住民参加型のシシ垣遺構調査と現代的意義を考える. 2006年度 (財) 日本自然保護協会の研究助成金による報告書, 30p.
- 羽山伸一 (2001): 『野生動物問題』 地人書館.
- 松田隆典 (2000): 明治前期地籍図類にみる比良山地東麓の村落空間と土砂災害 - 滋賀郡荒川村の事例を中心に -. 足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編 『地図と歴史空間』 大明堂, 33~46.
- 矢ヶ崎孝雄 (1989): 猪垣 (ししがき) の分布について. 文教大学教育学部紀要, 23, 11~22.
- 矢ヶ崎孝雄 (1990): 長崎県下の猪垣 一. 文教大学教育学部紀要, 24, 12~24.
- 矢ヶ崎孝雄 (1992): 沖縄県下の猪垣 一. 文教大学教育学部紀要, 26, 14~26.
- 矢ヶ崎孝雄 (2001): 猪垣にみるイノシシとの攻防 - 近世日本における諸相 -. 高橋春成編 『イノシシと人間 -

高橋：地域遺産としてのシシ垣遺構

共に生きる』古今書院, 122~170.

注1) 第1回シシ垣サミットは、2008年11月2日、3日の両日にわたり滋賀県で実施した。また、第2回シシ垣サミットは2009年10月11日、12日の両日にわたり香川県の小豆島で実施した。

注2) http://homepage3.nifty.com/takahasi_zemi/sisigaki/sisimein.htm